

文英さんの「ジュ」の「ジュ」の「ジュ」

橋爪 法一

燗鍋

心配しただけ損をしました。母の実家の従兄のことです。二週間前に訪ねたときには、連れ合いのヨシコさんが、「入ってもらえばいいがだでも、インフルエンザにかかって四二度も熱出して寝てるんだわ」と言っていたので、心配していたのです。

一週間後、私が訪ねると、従兄は玄関まで出てきて、「お茶飲んでいかんかい」と誘ってくれました。炬燵（こたつ）のところまで行くと、先客がありました。「おおくぼ」（屋号）のお父さんです。

炬燵の上にはレンコンの酢もの、大根やニンジンの煮物などヨシコさんの手づくりの料理が並んでいました。そして、真ん中には銅製の鍋がどんと置いてありました。この銅鍋はお酒を燗（かん）するための専用の鍋です。インフルエンザにかかった従兄はすっかり治り、「おおくぼ」のお父さんといっぱいやっていたのです。しかも、かなり出来上がっていました。

お酒を燗する銅鍋は初めて見ました。この鍋は「のうの」（屋号・母の実家）に代々伝わるもので、内側の錫（すず）のメッキはところどころはがれていました。

銅鍋の説明が終わったところで、「おおくぼ」のお父さんが「のうの」にまつわるお酒の昔話を始めました。

『『のうの』んちは人間だけでなく、飼っていた牛や馬まで酒好きだった。酒の匂いするもんだすけ、『のうの』へ行ったら馬まで酒飲むと言われたもんだ。『のうの』んしよのとこじや、牛はドブろく飲んでいるとも言われたもんさ』

近所に住んでいて、「のうの」についてはいろんなことを知っているだけに、「おおくぼ」のお父さんの話には説得力があります。しばらく、家畜とお酒についての話で盛り上がりました。

「飲めば、馬、あだけんでしょ」とヨシコさんが言うと、「おおくぼ」のお父さんは、「あだけね、あだけね。馬、酒飲むと立ったまま、いびきかいて寝るんだよ」と言いました。

みんな、信じられないといった顔をしていたので、今度は私が、牛のお産の時にビール飲ませてやったという話をしました。「へーっ、ビールも飲むんかい」「おらたりんしよはもったいながってくんねかったもんね」という声が出ました。ヨシコさんが後から言いましたが、昔は牛や馬は宝でした。大事な牛や馬に感謝の気持ちを込めてお酒を飲ませることがあっても不思議ではありません。銅鍋で燗をしたとなると、味を確かめてみたいという気持ちが動きます。でも、この日は車でしたから、飲むことができません。可哀想だと思ったのです。ようか、ヨシコさんが「つぐら」（屋号）からもらったという山形の餅を勧めてくれました。

「山形県の餅って、何がかわってんの」と訊くと、「ま、食べてみない。あぐあぐと……」とヨシコさんが笑って言いました。普通の豆餅としか見えませんが、何と、餅には砂糖が入っていたのでした。「つぐら」のイクコさんは山形県の出身だとか。「よく山形から来たもんだね」と言うと、ヨシコさんは「出稼ぎで一緒になって、おらちのジチャがもらいに行つて来たがだがね」と言つてまた笑いました。

私が山形の餅をご馳走になっている間も、従兄と「おおくぼ」のお父さんは賑やかに酒を飲み続けていました。銅の爛鍋で爛をすると、お酒はまるやかな、いい味の酒になるのだそうです。この日はお酒を飲まない私やヨシコさんをも包み込んで、楽しい、まるやかな雰囲気をつくりだしていました。

(二〇一四年三月)

鉄索

偶然と言えば偶然です。もし裏山の木の葉が落ちていなかったら、母の実家の居間からその構造物は見えなかったでしょう。木の葉が落ちて、雪が二尺も降つていけば、それはそれで障害になり、見えなかったはずです。

一二月の上旬、私は朝八時半に大島区嶺（竹平）にある母の実家に行きました。お茶をご馳走になりながら話をしていた、私は裏山の最上部にこれまで見たことがなかった四角い構造物があることに気づきました。「あの、四角いのは何？」と従兄に訊くと、「あれかい、鉄索の基づけさ。鉄で出来ている」という言葉が返ってきました。

実家の裏山の北側の下の方に田んぼがあったことは、母から聞いていました。確か、川の近くとこのことでしたから、裏山とは八〇尺近くの標高差があったはずです。そこで稲を作ったのですから、刈り取り後の運搬はたいへんだっただろうなと思っていました。母からは鉄索（てっさく）を使って引き上げていたという話を聞いていましたが、まさか、その鉄索の基の部分がいまも残っていたとは……。びっくりしました。

お茶を飲み終わってから、「さて、せっかくだから鉄索を見せてもらってから帰るとするか」と言うと、従兄も「じゃ、案内するこて」と言ってくれました。この日はちょうど長靴をはいていました。やぶのなかを歩けます。家の脇にある畑の上方の、かつて牛車が通ったことがあるという道を二分ほど歩くと、鉄索のある場所に着きました。

その場所は裏山の尾根といったらいいのでしょうか、そこからは尾神岳やかつて母らが学校の遠足で行ったことがあるという天明山（てんみょうさん）が見えました。その下の方に藤尾集落が見え、さらに下には小さな川が流れています。とても眺めのいい場所でした。すぐに従兄が説明をしてくれました。

「ほら、あそこに橋があるだろい、ちょっとしか見えないでも橋のこっち側に田んぼがあるこて。昔は四反くらい田んぼがあつて、刈ったイネ是一把ずつ鉄索にかけて上にあげたもんさ。稲刈りの時分は暗くなるのが早いすけ、一番最後のイネには布かなんか目印になるものをしぼりつけて、上の者に教えたてがど」

説明を聴きながら私は、当時の農作業の様子を想像しました。母の実家の裏山から北側の田んぼに行くには細い道があつて、そこをかつては荷縄を使って背負い、運び上げていたものと思います。四反作付していたといひますから、運び上げる量はちよつとやそつとの量ではありません。重労働から逃れたいという思ひは強かつたでしょうね。一時期、藤尾でトラックを所有していた人の世話になつたというのもうなづけます。

そうしたなか、鉄索は動きました。一把一把の作業ですから時間がかかるとはいえ、ワイヤーにかけたイネが次々と上がつて来る、その様子を初めて見たときの感動は大きかつたことと思います。

鉄索で上がってきたイネは高さが約二坪ほどの鉄索の基づけのところを外されます。外したイネはおそらく二束くらいにまるけたことでしょう。けっこう忙しかつたにちがひありません。それでも人力で上げていたときと比べれば月とすつぽんです。

鉄索が流行したのは四〇年ほど前だつたかと思ひます。酪農をやつていたわが家でも方式は違ひましたが、草を運ぶ手段として使ひました。耕耘機、そしてトラックの時代となつて完全に姿を消しましたが、一時期、農家の労働を軽減する大きな役目を果たしたことは言うまでもありません。その鉄索の一部が残つていたのです。私は「小さな歴史遺産」に出合つて、胸が熱くなりました。

(二〇一五年一二月)

物々交換

♪くもりガラスを 手で拭いて あなた明日が 見えますか――軽トラックから流れる曲は「さざんかの宿」。竹平倶楽部を過ぎたあたりから聞こえてきて、イナバ(屋号)の曲がり角あたりで大きくなる。

先日、長野の新井さんというリンゴ屋さんがリンゴなどを売りに来る話を母の実家で聞き、リンゴ屋さんが車で道を上つてくる様子を勝手に想像しました。そして、なぜか懐かしくなりました。

私の記憶にはリンゴ屋さんのことはほとんど残つていません。私が子どもだつたころは、リンゴやミカンを買うことはまずありませんでした。それだけ貧しかつたのだと思ひます。口にすることができたのは誰かが土産などでくれたときくらいです。ミカンは庵主さんがお経を読みに来られるときにわが家に持

ってきてくださいました。そのときだけです、ミカンを食べることができたのは。だから、庵主さんが来られるとき、私は遊びに行かないで庵主さんを待っていたものです。

トラックでやってくるリンゴ屋さんがわが家にやってくるようになったのは、三〇数年前、吉川区尾神の蛸場から代石に移住して以降のことだったと思います。ただ、流行歌は流していませんでした。

当時、リンゴは箱買いが主流でしたね。リンゴはひと箱に一八^キから二〇^キくらい入っていました。わが家ではそれを越冬用にということで二、三箱買っていました。私も一時期、活動資金をつくるために長野県の須坂市まで二トントラックでリンゴを仕入れに行ったことがありました。いまでは考えられないかも知れませんが、当時は、軽トラックでは間に合わないほど売れたのです。

蛸場に住んでいた当時、スピーカーで流行歌を流しながらやってきたトラックはリンゴ屋さんではなく、農協の移動販売車でした。家にいたときだけでなく、家の前の山に行ってもよく聞こえました。スピーカーから歌が流れてくると、「農協が来たな」と思ったものです。ただ、どんな曲を流していたかは残念ながら思い出せません。トラックはヒガシ（屋号）の下にとまり、そこへ蛸場の人たちが行って買い物をしたものです。

従兄夫婦からリンゴ屋さんの話を聞いていて強い関心を持ったのは、物々交換のことです。竹平では、ふた昔くらい前まで新井さんが持って来るリンゴやブドウなどは金で買うのではなく、コメで買う人が多かったといえます。コメをザルに入れて持っていき、リンゴなどと交換してもらった時期があったということです。

物々交換については、正直言って、私にはかすかな記憶しかありませんでした。わが家では何と何を交換したかなど知りたいと思ひ、母にも訊いてみました。その結果、私が住んでいた蛸場でも、海岸部から海藻などを持って行商にやってくる人との間で、コメや小豆と交換していた時期があったことを確認することができました。

行商と言えば、わが家にほぼ定期的にやってきたのは浦川原のMさん、この人はお茶屋さんでした。それと柿崎のMさん、この人は魚やつくだ煮など食料品が中心だったと記憶しています。あと、原之町からOさんが来ておられました。これらの人はバイクまたは歩きでしたから、物々交換はまずなかったと思います。

物々交換はちゃんとした信頼関係がなければ成り立たないものです。物と物を交換する商いがいまからそう遠くない時期まであったというのはうれいすね。

孫に励まされて

私の父の口癖のひとつは「孫は自分の子どもの一〇倍かわいい」でした。今月一三日の夜に亡くなった従兄の文英さんも同じだったようです。

通夜式が終わった後で、棺の中を見たとき、明らかに、孫たちからのものと思われる手紙が三通ありました。

三通は重なっていましたので、全体が読めたのは水色の用紙に書かれた手紙だけでした。そこには、「おこめをつくってくれてありがとう」「マンガをかっけてくれてありがとう」と書かれていました。

他の二通にも、「じいじへ お米を作ってくれてありがとうござい(ました)」「お米おくってくれて』ありがとう。(中略) これからもガンバルから見えて(てね)。だい好きだよ」などと書かれていました。

三通ともお米のことが書かれていたのは、「じいじ」と言えば、コメを作って、自分たちの家に送ってくれる人という印象が強かったからだと思います。たぶん、大島区竹平の「じいじ」の家に行くと、「じいじ」はいつも田んぼ仕事をしていたに違いありません。

そしてもう一つ、三通の手紙に共通したことがありました。いずれの手紙も用紙の一角に絵が描かれていたのです。メガネをかけた男性が両手を上げている絵は、元気に仕事をしていたころの文英さんなのでしょう。まんまるの顔をした子どもが「大好きだよ」と言っているのもありました。どの絵も文英さんに見てもらいたくて描いたものなのでしょう。

もちろん、「じいじ」は田んぼで仕事をしていただけでなく、孫たちが来れば、いつも遊び相手になっていました。

私が葬儀の際、見せてもらった写真の一枚に、「のうの」(屋号)の車庫のそばで「じいじ」と孫が雪遊びをしているものがありました。雪の上でソリを引っ張って遊んでいる孫がいて、その様子をすぐそばでやさしく見つめる「じいじ」がいる。派手さはなく、孫と遊ぶ喜びが静かに伝わってくる写真でした。

私は、一〇年ほど前から、ほぼ毎週、文英さんの家に行っていたのですが、正月、五月の連休、お盆のころに行くと、玄関の雰囲気が一変していました。小さな靴がいくつも並んでいて、パーっと賑やかになっていました。そういうとき、玄関先で文英さんに声をかけると、「孫たちが来てるがど」と言っていて、いつもうれしそうでしたね。

文英さんは数年前に体調を崩し、闘病生活に入りました。以来、東京在住の次女、S子さん夫婦の家に世話になりながら、病院へ通う、場合によっては入院することが多くなりました。いうまでもなく、孫たちと一緒に時間も増えました。

「ああ、『のうの』の文英さんは、孫と一緒に生活のなかで愛され、元気をも

らい続けていたんだな」。そう思ったのは、棺の中に入った「じいじ」の唇にお酒をぬってあげ、体にも少しかけてあげていた子どもたちの姿を見たときでした。何をしてやれば「じいじ」が一番喜ぶか、よくわかつていたのです。

一三日、呼吸困難に陥った文英さんのところへ孫たちがかけつけました。いつもおいしいコメを作ってくれた大好きな「じいじ」の苦しんでいる姿を見て、孫たちは、「じいちゃん、頑張って！」と何度か声をかけました。すると、なんということでしょう、文英さんが「おーっ」と言ったというのです。しかも二度も。

(二〇一九年二月)

命のつながり

このところ、命について考える機会が続いています。

例えば五月五日、私は大島区で従兄の納骨式に参列していました。ここでも命について考える機会を与えてもらいました。

この日、仏壇の前でお経を上げてくださった吉川区の専徳寺住職の松村公雄さんは、「亡くなった日のことを『死亡年月日』と呼ばず、なぜ『命日』と呼ぶのでしょうか」と私たちに問いかけられました。そして、少し時間をおいて、「命日とは命のバトンを渡す日」とおっしゃったのです。

松村さんからは、だいぶ前にも「命のバトン」という話を聴いていたこともあり、この日は、松村さんのこの言葉がずつと頭に残っていて、命日や法事のことを考える素地はできていました。

この日、「庄屋の家」で行われたお斎の席では出席者の一人からたいへん興味深い話を聴きました。

話を聴かせてくれたのはKさん。亡くなった従兄の母親と同じく、Kさんの母親も大島区竹平の「むこう」（屋号）の出身でした。Kさんは、かなり前に角間から柿崎区上下浜に移住しています。

Kさんは、自分が子どもの頃、母親の実家へ泊まりに行ったときのことについてふれ、「浅五郎さんというじいさんはじつに達筆だった。それと布団の中で昔話をしてくれた」と語りました。またKさんは、自分の母親が若い頃、東京は神田神保町の「大雲堂」という古本屋に奉公に出ていたことについても語ってくれました。

話を聴きながら、私は浅五郎さんからKさんの母親、さらにKさんへとつながっているものがあるなど感じました。

そして今月一二日、直江津の三八市の通りに面した聴心寺の掲示板に書かれた言葉。これがまた、すばらしいものでした。

花は散っても

花は死なない

翌年 また 花は咲く

人は死んでも

なくならない

縁あつた人の心に

生き続ける

縦七〇^キ、横一^ハ一〇^キほどの掲示板に、一字一字丁寧に書かれていました。書いたのは同寺の住職だった居多徳恵さんです。徳恵さんは五月六日、満六四歳で亡くなられたのですが、亡くなる前日か前々日に掲示板にこの言葉を書かれたということです。まるで、「自分が死んでも悲しむことはないよ」と遺言を書かれたかのようで、徳恵さんのことを知っている人はみんなびつくりしました。

私はここ数年、同寺の掲示板を見続けてきました。徳恵さんが自分で言葉を考え、しかも自筆で書いておられたことは十分承知していたのですが、それでも、ひよつとすれば、掲示板を書いていたのは坊守さんかもしれないと思っただけです。

私は、フェイスブックや毎週発行の活動レポートなどでこの掲示板の言葉を紹介しました。それを読んだ多くの人から、「ご住職のお人柄が伝わってくる掲示板、最後に素晴らしい大事にしたい言葉を残された」「身近なものが亡くなつて悲しい思いをしていたが、これで元気に生きていけます」などの声が寄せられました。

Kさんの話といい、聴心寺の掲示板といい、私の心に響きました。そして、思ったのです。「人の命はつながっていく。自分が死んでも、『人の心に生き続ける』生き方をしなければ」と。

(二〇一九年五月)